

エコ神学試論

——ティリッヒを手掛かりに——

近藤 剛

一九六〇年代から北米を中心に、キリスト教神学とエコロジーの関係が活発に議論されてきた。とりわけ、リン・ホワイトがキリスト教の内在的論理(dominium terrae)に生態学的危機の歴史的根源を看取し、その専制君主的な自然支配の正当化を指弾したことから、様々な神学的応答が巻き起こった。いわゆるエコロジーの神学という試みである。このような動きに先駆けて、自然と技術の問題を神学的課題として位置付けていたのが、パウル・ティリッヒである。それらの問題に関する彼の取り組みについて量的には本格的なものと言えないが、随所で示される洞察には今日でも通用する鋭い指摘と先見性が認められる。本稿ではティリッヒ解釈の一環として、彼のエコ神学を再構成するよう試みる。

豊かな自然環境の中で幼少期を育まれたティリッヒは、シェリングの自然哲学へ傾倒したことで知られる。彼はシェリングの強調した自然における所与としての神的現在こそ恩寵の再発見に他ならないと評価しており、その後も一貫して自然に関する問題意識を持ち続けた。例えば、ティリッヒは一九四七年の説教「自然もまた、失われた善のために嘆く」において、人間の意志と恣意に従属させられ、技術文明の支配と無情な開発によって荒廃させられた自然の有様を悲嘆している。そして、聖書の解釈に基づき、自然の栄光の内にある神の栄光を讃え(詩

篇)、自然の悲劇を人間の悲劇に結び付け(パウロ)、世界の救済の内に自然の救済を見る(黙示録)ことが重要であると力説している。

こうした自然観と共に興味深いのが、ティリッヒの技術論である。これは主に「技術のロゴスとミュートス」(一九二七年)と『組織神学 第三巻』(一九六三年)を通して展開されている。「技術のロゴスとミュートス」では、自然と精神の双方に関わる技術的行為が論じられている。技術的行為とは、目的に合わせて手段を立てることである。自然も自らの目標を達成するために驚嘆すべき手段を用い、技術的に振舞っている。精神の技術的行為は、当初の目的を果たしてしまうと、目的のための手段に過ぎなかったものを目的化し、人類を無限の可能性へと誘う。経済的な必然性と効率的な合理性に由来する生産活動が原動力となって、技術は飛躍的に向上し、人類は常に新しいものを得ることができるところが、技術の進歩は我々の予想範囲を超え出る。一体それが我々をどこへ連れていくのか、誰にも分からなくなる。技術が持つ無限の可能性の誘惑に負けると、我々の意味も存在の必然性も見失われていくと、ティリッヒは警告する。つまり、技術は一方で神的であり、創造的であり、人間を解放するものであるが、他方でデモニッシュなものであり、破壊的であり、人間を隷属化するものである。ティリッヒは早くも一九二〇年代において、技術の両義性がもたらす文化的な歪曲を明確に予見していたことになる。

『組織神学 第三巻』でも、技術の両義性が問題視されている。ここでは、精神の技術的行為は文化(精神の次元における

生の自己創造性)の基礎的機能として位置付けられている。有機的プロセスの内的目的がプロセス自体によって決定されているのに対して、技術的生産の外的目的は決定されておらず、無限の可能性(自由と選択)に開かれている。しかし、このことが手段と目的の転倒を引き起こす。つまり、手段が可能であるというただそれだけの理由で、手段が目的化してしまう。そして、手段の生産が目的となり、技術は暴走する。こうした技術の両義性という深刻なジレンマを今日の我々の状況に引き寄せて例えるならば、原子力発電の功罪に表れていると言えよう。テイリッヒが指し示したように、あらゆる被造物の呻きを聞き、自然と精神が和解する新しい存在を望み、両義性を神律的に超克していく方途こそ、我々が歩むべき未来への第一歩となるのではないか。

「相関」という問題について

松田健三郎

テイリッヒはオットーを評する。『聖なるもの』の副題「神なもの」の理念に存する非合理なるもの、ならびに合理的なるものに対するその関係について、その後半に関しては、一連の未解決の問題が残されている、とりわけ神秘的なものと合理的形式とのあいだに存する本質的かわりを明示していないという。オットーによれば、「聖なるもの」とは複合理念であり、その作用原理として措定されるのが図式なのである。このよう

な「図式化」の関係が、聖なるものという複合理念における、合理的なものと非合理的なものとの関係である。この図式を、オットーはカントに依拠して提示する。カントは「時間的図式と因果のカテゴリーの結合」というが、オットーにおいては「カテゴリーと図式の結合の根拠」とはなにか。直接の説明も、カントの超越論的図式としての時間に相応するものもない。さて、カントの図式論に立ち返ってみると「図式論は最も難解な点の一つである。：わたしはこの章を最も重要な章のひとつであると考える」、さらには「我々の悟性のこの図式論は、人間の魂の深みに隠された技術である。そのコツをわれわれが自然からいつしか察知し、これを眼前に頭に提示することは難しいであろう」ともいわれる。この意味で、カントは「魂の深み」でアポリアに逢着し、「蹉跎」した。オットーの持ち出す「図式」が、カントの超越論的図式論に依拠するものであるなら、カントのアポリアと「蹉跎」も自身のものでもあろう。しかし、カントに相違して、オットーは「仮定」はすれども「措定」はせず、そこに原理的懸隔としての深遠を認めたのだった。シェーラーは、この方法は(純粹な方法としては)いわゆる否定神学の方法と根本において異なるものではないという。いみじくも、オットーは随所に神秘主義者を語り、かれらの沈黙としての饒舌、饒舌としての沈黙、その対象を areton (言い難いもの)と規定し、その言辞は「総合的な本質的な述語」であるという。その極として、パラドックス、アンチノミーをあげる。否定神学の方法であり、本質である。さて、「なぜこういうことは遣いをするのか。なぜこのことは遣いが否定神学